

## 「騎馬民族征服王朝説」の問題点

岡 内 三 眞

### 1. はじめに

1948年に江上波夫氏によって提唱された「東北アジア騎馬民族系王朝の日本征服・統一国家樹立説（以下は騎馬民族征服王朝説と略称）」は、形を変えながら今なお一般の人々やマスメディアをとらえ続けている不思議な仮説である。しかし一般の人々の「騎馬民族征服王朝説」の理解はきわめて表面的であって、その内容を正確によく理解した上での肯定とは考えがたい面が多い。過去の理論と旧式の研究方法によって組み立てられた、学説としては成り立ちがたい仮説で、史料批判の甘さ、強引な史料の引用や恣意的な解釈を多くの考古学者、文献史学者、民族学者が批判し、指摘してきた。しかも騎馬民族と農耕民族とは優劣があるという誤った差別観を持ち、危険な侵略史観につながる世界観、歴史発想を含む点を筆者も指摘したことがある<sup>(1)</sup>。こうした点については既に発表した論文を一読いただきたい。

なぜこの仮説が専門の研究者からは手厳しく批判されながらマスコミや一般の人々にファンが多く熱烈に歓迎されるのであろうか。その理由として次の点が挙げられる。

①戦前・戦中は批判がタブーであった「建国神話」や「皇国史観」が否定され、日本国家成立史が一時的に空白になった戦後の混乱期に発表されたタイミングと、「皇室の歴史」と「建国神話」とを科学的に解釈した新鮮な歴史構想とみなされたこと。

②それまでは聞き慣れなかった「大陸北方系騎馬民族文化複合体」とか「騎馬民族軍団」や「征服王朝」といった言葉から得られる東アジアの壮大さ、言葉のひびきとそれによって掻き立てられるロマンチックなイメージがある。

③学説としては不備であるが、要点のみを述べた座談会記録や講演集でのべる話しは、読者やマスコミが自由に想像や空想を羽ばたかせる余地や楽しさを持っていたこと。

④多くの批判をものともせず孤軍奮闘し、ことあるごとに論証抜きで自説を都合よく解釈し明快に説き、講演や対談をこなし、精力的に普及活動を実践する。権威ぶらず話し上手な饒舌家で、＜語り部＞としての天性の資質が江上氏には備わっていたと、私なりに解釈している。

ところで最近の「騎馬民族征服王朝説」は、1948年の発表当時とは大きく変質し、常に変貌を遂げるので、批判、検討する前に最新の説を確かめておかねばならない<sup>(2)</sup>。

この仮説は、現代では通用しなくなった戦前の古い仮説：喜田貞吉の「日鮮両民族同源論」を基礎にして、戦前・昭和初期の歴史教育を受けて北京に留学し、軍隊の庇護の下に中国東北地区

や内蒙古を闊歩した江上流の資料収集法と旧式研究法に基づいている。40数年まえに発表された仮説を時代遅れと批判するのはしのびないが、いまなお繰り返される分析方法や年代比定、事実解釈などの点で問題が少なくないばかりか、選民意識をもち民族差別と侵略思想につながる危険な要素を含んでいる点は指摘せざるをえない。

江上氏が無意識に吐露する現代論や人間観にはアジアの人々の心を逆なでするような言葉が含まれている。敬愛する考古学界の大先輩ゆえにこうした発言は自制して載きたいものである。

さらにまた騎馬民族がどのように侵入して倭を征服し、いかにして征服王朝を樹立したかを、考古学の面から立証し、明らかにして行く方法を提示していない。現代の考古学界が到達している厳密な考古学的資料の操作方法や細かな地域差、緻密な年代比定の成果を尊重せず、出土した馬に関連する遺物を、騎馬民族の渡来と征服を示す資料として解釈するにとどまっている。騎馬の風習や馬具の存在が、騎馬民族による征服によってなされたと証明する具体的な方法が示されていないのである。また「騎馬民族」をはじめとする用語の概念規定が曖昧なために、変幻自在に解釈されて議論がかみあわない。まず「騎馬民族」や「征服王朝」をはじめとする用語の定義を厳密に行う必要がある。農耕民の生業と対比できるのは、遊牧民や牧畜民、採集狩猟民、漁労民であり騎馬民ではないからである。遊牧系の騎馬民族がいれば、農耕系の騎馬民族も存在し、江上氏自身が半農半牧の「夫余族」を騎馬民族として認め、日本人も騎馬民族的になったとしているからである。たとえ倭に騎馬の風習が存在し馬具や甲冑が出土しても、牧畜民と農耕民とによる騎馬文化の扱い方の違いを識別する方法が示され、差異が論証されないかぎり、水掛け論に終始する結果となろう。倭にとどまらず東アジアの農耕民と遊牧民との間にみられる騎馬の風習を、どう扱えば水掛け論を防ぎ、建設的な論議が可能になるかを追求したいものである。

江上氏の場合、まず厳密な学術用語を規定し、騎馬民族と特定できる要素と基準とを設定し、騎馬文化遺物の機能的側面の追究と認定方法など、征服王朝の樹立を考古学的に解く方程式を明示する必要がある。

都合の良い騎馬文化の遺物だけを取り上げるのでは、朝鮮や日本で地道な発掘調査が進み新事実が検出されても、前向きに解決することはできない。ここにも「騎馬民族征服王朝説」がいつまでも立証できず、逆に大きく崩れない秘密が隠されている。

実に「騎馬民族征服王朝説」は、われわれが突き崩せない以上に江上氏自身にとっても実証できないやっかいな代物に変わり果てている。

## 2. 中国大陸と朝鮮半島における騎馬文化

まず江上氏は「中国東北地区の松花江流域に原住した夫余系の半獵・半牧あるいは半農・半牧の騎馬民族が、朝鮮半島の南半部に侵入して三韓の大半を支配し、馬韓の月支国に都を置き辰王国という征服王朝国家をつくった」と主張する。前漢代の真番傍らの「辰国」と、時期の異なる

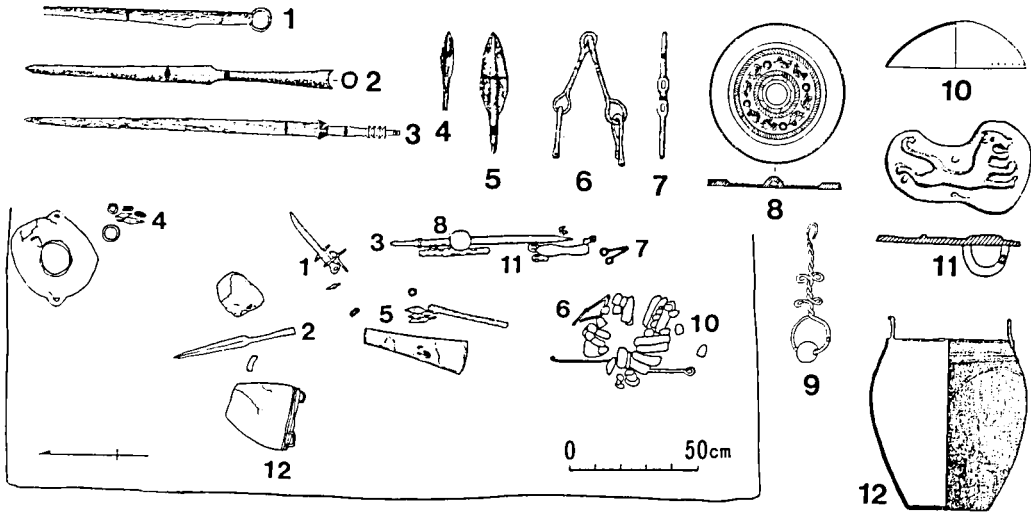


図1 榆樹老河深97号墓の遺物伴出状態 (1環頭鉄刀, 2鉄矛, 3鉄剣, 4, 5鉄鏃, 6, 7はみえだ轡, 8後漢鏡, 9銀製耳飾り, 10蒙古鉢形冑, 11虎紋飾り金具, 12銅鍔)

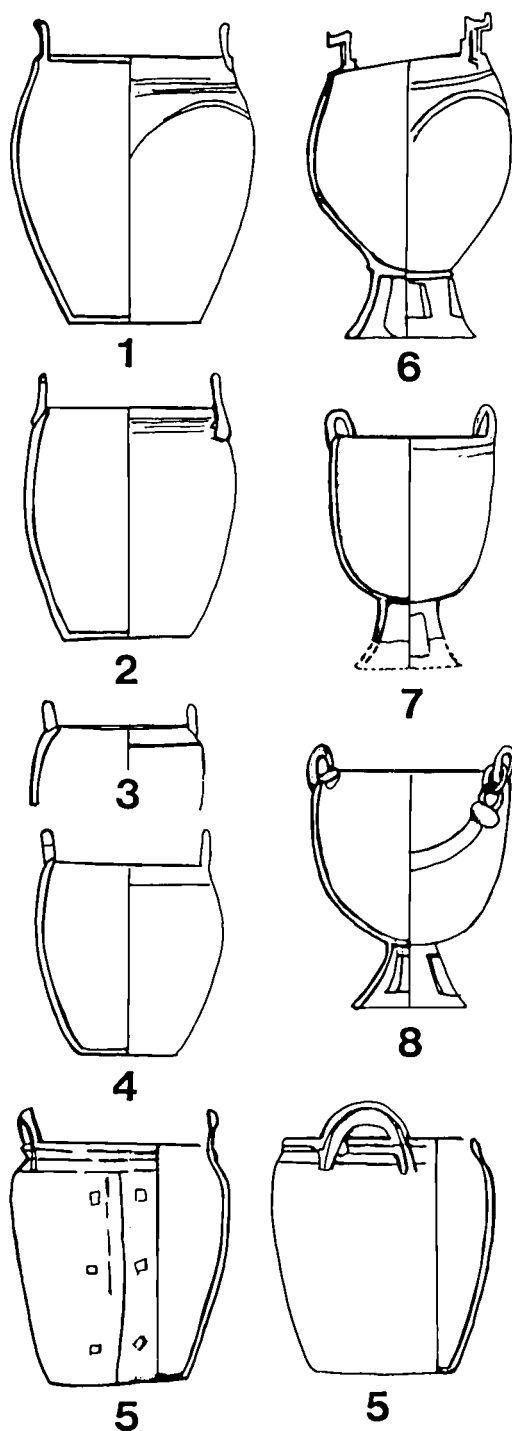
三国時代の馬韓・月支国で共立された「辰王」とを、200年の時代差を無視して強引に結び付けている。また「辰王」は馬韓人と文献史料に記され夫余族とは断定できないし、「辰王」や「辰国」が、騎馬民族による征服王朝であった考古学的な証拠も見当たらない。まして東アジアの歴史のなかで、松花江流域から朝鮮半島の中部西海岸にかけて民族が移動した痕跡は、考古学資料にも文献資料にも見いだすことはできない。

無理を承知で「辰王国」の出発地で夫余族が住んでいたという中国東北地区と朝鮮半島との関連を考古学的にたどると、後漢代までさかのぼる。それは吉林省榆樹老河深にある鮮卑族とみられる半農半牧の北方民族の騎馬文化で、群集した墳墓の墓域内から、遺物が原位置を保ってセットで発掘されている<sup>(3)</sup>。

半農半牧の北方民族に特有な騎馬文化の遺物と葬送儀礼に基づく文物の配列、副葬状態の見分け方として参考になる貴重な埋葬例である (図1)。

夫婦合葬墓である97号土壙墓の男性に伴った副葬品をみると、鉄剣、鉄刀、鉄矛、銀製耳飾り、鉄製甲冑、鉄製はみえだ轡、銅鍔などがある。これらは、新羅や伽耶古墳出土品の源流とみなしてよい古い資料である。副葬品は、大きくは頭部と足先、それに身体の左右両側に分けて配置している。なかに鉄製轡が二組出土し、ひとつは遺骸の東側足元で鉄剣や銅鍔、虎紋飾り金具、双竜紋馬面などと共に置かれていた。いまひとつは遺骸の西側足元で堅矧板革綴冑や挂甲、鉄刀などと重なって出土した。容器には土製の浅鉢と双耳壺、それに銅鍔があり、土器は頭側の墓域端に、銅鍔は頭の横にそれぞれ場所を違えて配置している。

男性のみを埋葬した56号土壙墓では、頭の横と足先にわけて馬具の轡を配置している。武器は



矛、鉄鏃矢をいれた胡録、鉄剣、環頭鉄刀の一揃いを、身体の南側にそわせ、足先に甲冑と馬具、銅鍔とをひとまとめにして配列している。身体の北側には、鉄鍬先、鎌などの使用痕のある農具をそえている。身体のそばに添えた文物と足先にまとめて置いた品物との区別がある。

このように老河深の鮮卑墓では、武器〔剣、刀、鏃〕や馬具〔轡、馬面など〕でも、身体のそばに添えた品と足先にひとまとまりで置いた品との違いがある。被葬者が生前身につけていた着装品、生前からの所有品、葬送儀礼に使った葬送用品、献上品または贈答品などであろう。武器や馬具は、ハレの儀礼用に使う品と、戦闘や輸送の実用品とを区別して配列した可能性が高い。副葬品からみると、農具や馬具があり乗馬にたけた半農半牧の生活であったとみなしえる。

朝鮮南部に目をうつすと、伽耶古墳の金海良洞里や金海大成洞、東萊福泉洞などで馬具や北方系文物が出土している。4世紀中葉から4世紀末にかけての大成洞3号墳や39号墳、2号墳などから堅矧板革綴冑、挂甲、付属具、轡や杏葉が出土し、5世紀前葉の大成洞1号墳や11号墳などからは、木槨墓の上部から殉葬した馬が発掘されている。また大成洞29号墳、47号墳、良洞里235号墳からは、北方式の銅鍔が出土している（図2）。銅鍔の起源が北方にあるとしても、顧志界氏が論じたように銅鍔そのものは中国内部の四川省、湖北省にまで伝播、普及している<sup>(4)</sup>。また江上氏は銅鍔は天神を祀る神聖な祭器としているが、出土状態を検討すると日常用の煮炊土器と伴出し、移動や使用に際して堅牢な実用の煮炊具であったと判

図2 鮮卑，伽耶の銅鍔（1 榆樹老河深97号墓，2 黑竜江省鳳林故城，3，4 内蒙古補洞溝，5 大成洞29号墳，6 榆樹老河深57号墓，7 陝西省閔庄鎮，8 朝陽袁台子）

定できる。伽耶、高句麗、新羅をつうじて、金属製（銅製、鉄製）の容器は土器と共に出土している。

申 敬澈氏は、大成洞の木槨墓、騎馬用甲冑と馬具、陶質土器、人と馬の殉葬、折り曲げた武器の副葬習俗などから、4世紀中葉を上限とし5世紀前葉までに海路を通じての騎馬軍団の到来があったと想定している<sup>(5)</sup>。経路についてはなお再考の余地があるが、伽耶の墳墓に変革があったのは確かである。しかしその変革が騎馬民族の移動、移住でなければ達成できなかったかについては、なお検討の余地がある。竪矧板革綴冑や銅鍔などの類似から騎馬の技術や文物の移動は肯定できる。しかしそのみでは「征服王朝の辰王国」を証明したことにはならない。新旧遺構の特徴、副葬品の配置状態、新来の品と従来の武器や馬具との組み合わせなどから、その背後にある人々の思想や集団の特質を復原し、解きあかす努力が必要である。そうでないかぎり、江上氏の主張するように倭と中国東北地区とを結ぶ「ミッシングリンクが見つかって騎馬民族の移住や征服王朝が実証された」ことには到底なり得ないのである。

ついで「4世紀の初めころ、ミマキイリヒコ（和風諡号・ハツクニシラススメラミコト、漢風諡号・崇神天皇）が、朝鮮海峡に面した北九州の各地を併合して韓倭連合の征服王朝国家をつくり、その国名を日本と名づけ、都は金官加羅において日本府といった」と主張する。にわかには信じがたい個別の文献記載を強引につなげた解釈である。

4世紀初めの東アジアをみると、中国では五胡十六国から南北朝の初めにかけて、朝鮮では三国古墳時代の前期、日本では古墳時代の初めにあたる。この時期に江上氏の述べるような韓倭連合を示す変化が朝鮮南部から北九州一帯にかけて起こったとは、現有の考古学資料からはとても認めがたい。むしろ倭と韓の間で盛んになった相互交流の結果として、北九州製文物のほか畿内系の土師器や石製腕飾類、碧玉製石鏃、巴形銅器など畿内の影響下で作られた品物が加わり、伽耶から新羅の都・慶州まで前の時期よりもさらに広い範囲に分布している。つまり畿内を中心とした文物の量的な広がり、製品の規格性などからみて、畿内系の文物が西日本全体に拡散し、東から西へと運ばれていった現象を見いだすのである。

その背景には畿内に存在した政治権力の主導のもとに西日本への勢力の拡大と扶植が行われ、伽耶や新羅との対外交渉も行われたと解釈できるのである。朝鮮南部と九州北部とに限られた関係ではなく、畿内と朝鮮南部とのより広いつながりを明示している。これを韓倭連合とよぶならば、むしろその中心勢力は畿内に存在したことになろう。

4世紀初めの東アジアは、西晋の滅亡にともない北方の諸民族が華北に進出し、朝鮮半島では楽浪郡や帯方郡が瓦解し、高句麗や百済が勢力を拡大した激動の時代である。倭を含めた東アジア全体が東西、南北にわたって争乱と交流の著しかった時代なのである。朝鮮南部出土の倭製品や倭系遺物は、その流れの一端を物語るのであろう。

4－5世紀にわたる朝鮮や倭の乗馬の風習、騎馬文化に関係が深いのは、五胡の中でも最も東

方に位置して高句麗に接触していた慕容鮮卑系の諸王朝・三燕（前燕，後燕，北燕）の文化である。その具体例は，河南省安陽孝民屯墓<sup>(6)</sup>，遼寧省朝陽袁台子墓<sup>(7)</sup>，遼寧省北票・馮素弗墓<sup>(8)</sup>，本溪市晋墓<sup>(9)</sup>などから出土した遺物，特に馬具類がこれを雄弁に物語っている。

たとえば安陽孝民屯では，鞍を枕にして伸展葬した木棺内の被葬者に，馬の尻繫飾りを覆いかぶせてあった。頭側の壁際に牛の大腿，足元に馬と犬の頭蓋をそえている。いかにも牧畜を生業とする畜産民で，乗馬にたけた民族を彷彿とさせる埋葬である。

また袁台子墓では，牛車や騎馬人物，重装騎馬など高句麗壁画と同じ題材を描いた壁画のある主室から，銅鍔のほかは主に中原系の文物が出土した。そして耳室には，装飾性の強い馬具一式を納めていた。銅鉢や漆盆には犠牲の羊をのせ，北方系文物と中原系文物とが同じ墓の中で異なる場所にそれぞれ置かれている。北方と中原の文物を用途に応じて使い分けているようにみえる。

墓室内に羊や牛，馬が納められているのは，食用の家畜をもつ畜産民の墓である特徴を明確に表している。これに伴う馬具もやはり乗馬，騎行の実用馬具という印象が深い。これらは牧畜を生業としながら乗馬に長じた騎馬文化をもつ鮮卑族とみなし得る。

つぎに朝鮮半島における三国古墳時代の騎馬文化は，基本的には北方民族系（慕容鮮卑）の流れを汲み，これに遼東や楽浪の漢の系譜をひく騎馬文化が加わる複合体である。それを高句麗，百濟，新羅，伽耶が独自の伝統文化に基づいて，選択して導入し，発達させている。たとえば漢民族や北方民族には存在し，高句麗までは確実に伝わる車輿具（牛車）も，百濟や新羅，伽耶では未発見である。鮮卑や漢と地続きで境を接し，直接に贈答や交易，戦闘があった高句麗では，武装や騎馬にも多様性がめだち，壁画の中の主人公が牛車（図3）に乗るなど，他の朝鮮三国にくらべると騎馬文化の比重が大きかったと想像できる。

いずれにせよ騎馬文化の取捨選択は，導入する側の主体性があった事実を示している。日本でも人が乗る牛車の出現は，後の時代まで待たねばならなかった。移動を常とする遊牧民，牧畜民にとって必要不可欠な輸送用の車輿具を欠く現象は，倭でも百濟，伽耶でも騎馬民族によって征服され否応なしに騎馬文化を受け入れたのではない事実を反映している。

逆に南船北馬とうたわれ，騎馬民族の蹂躪を受けた経験のない中国南朝でも，乗馬の風習が広がり，さらに重装騎馬の飾り馬も鄧県磚室墳<sup>(10)</sup>の彩色壁画に表現されている（図4）。このように乗馬が得意でない中国南朝例からみても重装騎馬の飾り馬や乗馬技術の存在だけでは，騎馬民族の渡来，征服を証明できない。もっと遺構や遺物の状態，乗馬技術，利用形態などについての緻密な分析と論証が必要なのである。

そればかりか湖南省長沙市金盆嶺21号墓（西晋の永寧二・302年）からは，馬の左側だけに鐙を吊り下げた明器の陶俑4点が出土している<sup>(11)</sup>。しかも騎乗しているのは武官ではなく文官である（図4）。ふつう乗馬，騎行しない騎馬の不得意な江南の農耕民によって，馬の背にのぼる際の足がかりとして鐙が考案され，乗る側だけに垂下したとみなされている<sup>(12)</sup>。

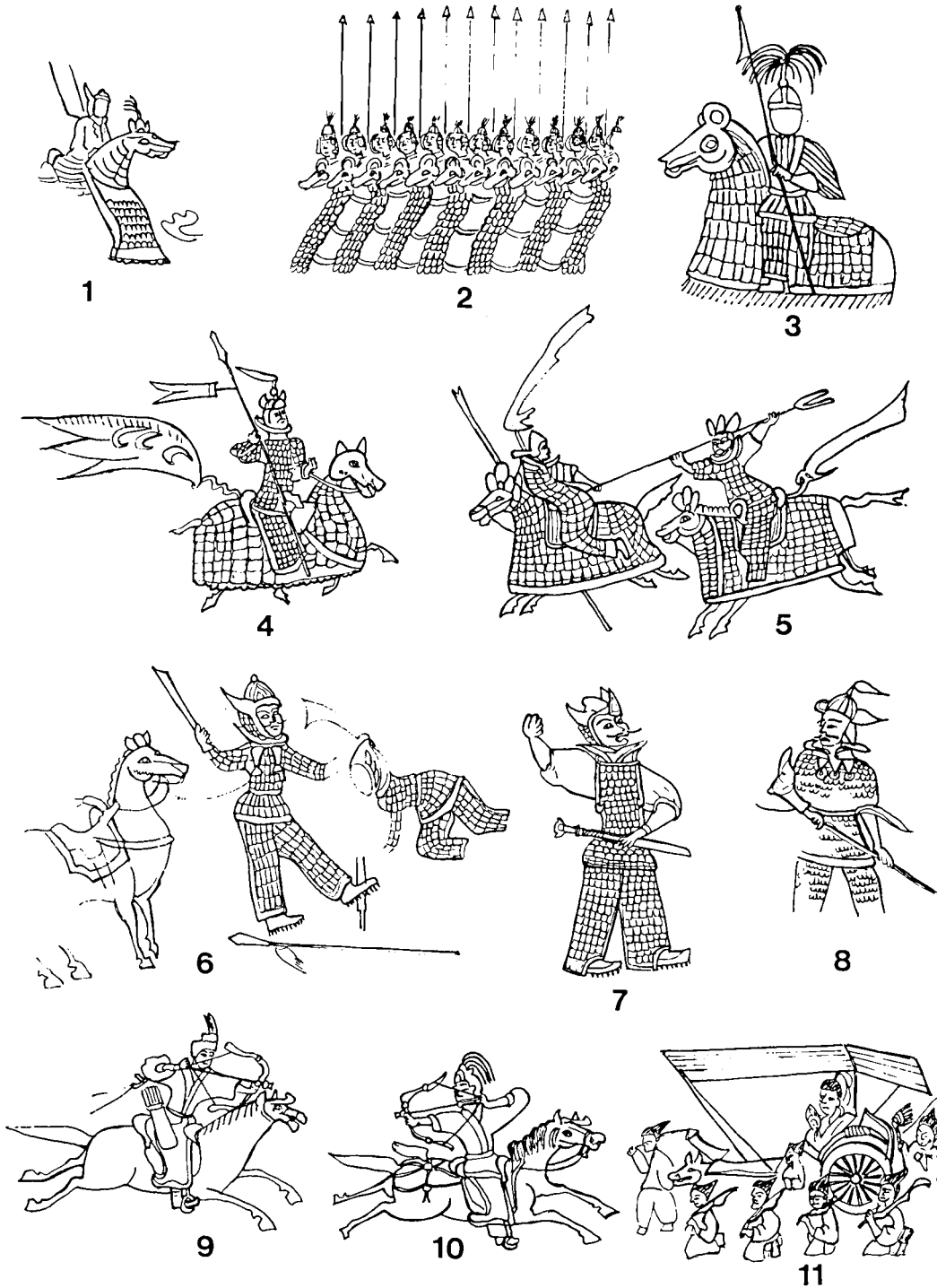


図3 高句麗壁画の騎馬戦闘図 (1麻線溝1号墳, 2薬水里古墳, 3,11安岳3号墳, 4双楹塚, 5,7三室塚, 6通溝12号墳, 8安岳2号墳, 9,10舞踊塚)

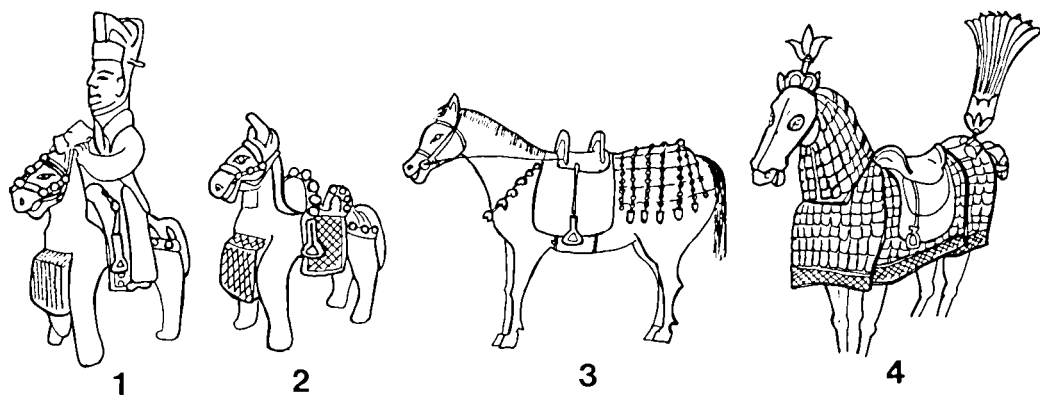


図4 東晋，南朝の飾り馬（1，2長沙金盆嶺，3朝陽袁台子，4鄧県彩色画像磚墓）

乗馬のための重要な馬具である鐙でさえ、牧畜民ではなく農耕民によって考案、開発される場合があったのである。馬具や乗馬技術は、常に北方民族の発明、工夫によるという硬直した固定観念ではなく、柔軟で多様な発想が求められている。

さて朝鮮半島の伽耶で古く位置づけられる甲冑は、4世紀初めの慶州九政洞3号木槨墓出土の堅矧板鉄留短甲と金海礼安里150号木槨墓出土の堅矧板革綴冑である。慶州陞城洞や釜山東萊貝塚、昌原城山貝塚などでは冶鉄址を発掘し、また鍛冶工具セットを各地の古墳で検出している。鉄製甲冑の地金である板状鉄斧や鉄鋌は伽耶と新羅の古墳から大量に出土し、『魏書；東夷伝』に記された「弁辰の鉄」資源を背景に、朝鮮南部で鉄製甲冑の製作が行われたのであろう。伽耶の鉄製甲冑の製作開始が4世紀初まで遡るのは、4世紀中葉の初期甲冑の定型化から推測できる。

この段階では馬具と甲冑とはまだ共伴していない。伽耶における甲冑の生産が騎馬の出現と一致するわけではない。今後は遺構での馬具と武器や武具との伴出状態、組み合わせ、それらから帰納される使用の実態や、馬具や武具が出現する経緯などを把握すべきであろう<sup>(13)</sup>。

4世紀中葉の甲冑は、金海大成洞18号墳などから蒙古鉢形冑が、4世紀後半の福泉洞46号墳から堅矧板鉄留め短甲、大成洞3号墳などからは蒙古鉢形冑、頸甲、挂甲が出土する。

馬具では、慶州朝陽洞Ⅱ区1号木槨墓から後漢の系譜をひく古い三連式の鉄製はみえだ轡が出土している。これより時代が下がる4世紀中葉のはみえだ轡が、福泉洞69号墳、大成洞39号墳から出土する。4世紀後半になるとはみえだ轡が福泉洞71号墳、60号墳、42号墳などから続いて検出されている。いずれも伽耶のはみえだ轡には、立聞と引手がつくという特徴を備えている（図5）。大成洞2号墳からは鏡板付き轡、福泉洞48号墳からは木心鉄板張輪鐙が出土している。4世紀中葉の馬具は、出土数がまだ少ないが、4世紀後半になると数がふえるとともに乗馬に適した挂甲や頸甲などの武具も出現する。

5世紀前葉の甲冑は、大成洞7号墳などから蒙古鉢形冑、挂甲が出土し、福泉洞34号墳からは



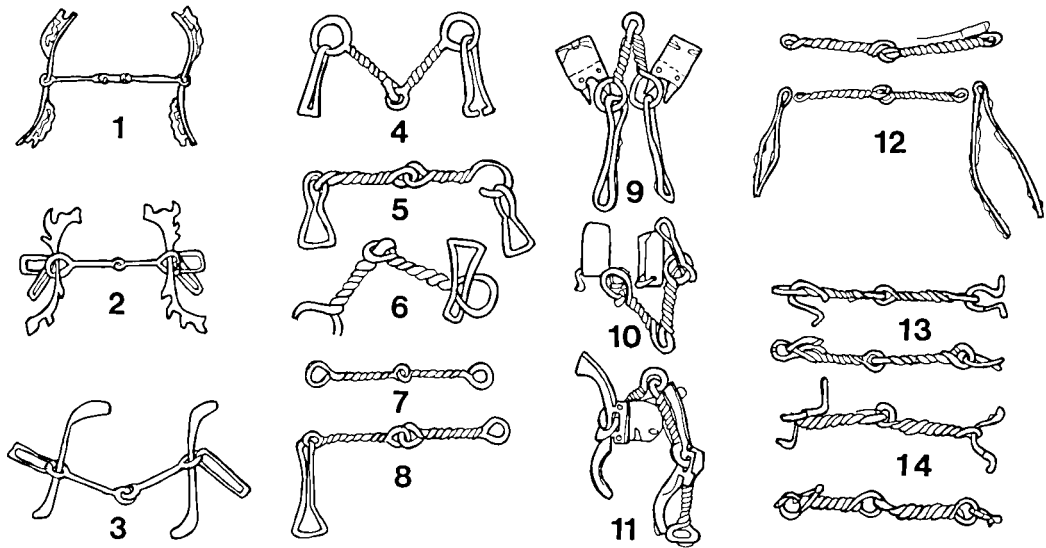


図5 鮮卑, 高句麗, 伽耶, 倭のはみえだ轡 (1 河北省陽原, 2 万宝汀242号墓, 3 榆樹老河深56号墓, 4 恒仁19号墓, 5 禹山墓区3241号墓, 6 禹山墓区3283号墓, 7, 8 禹山墓区3560号墓, 9 福泉洞69号墳, 10 福泉洞71号墳, 11 福泉洞60号墳, 12 老司古墳2, 3号石室, 13, 14 池の上6号墳)

蒙古鉢形冑と馬甲, 慶州皇南洞109号墳4 柳から蒙古鉢形冑と馬冑が出土している。このように4世紀後半から5世紀初にかけて騎馬戦闘用の馬具と騎馬戦闘に適した挂甲とが出土し, しだいに数量が増加していく。

5世紀前葉の馬具は, 大成洞3号墳, 1号墳で心葉形杏葉, 大成洞8号墳で轡, 心葉形杏葉, 馬甲, 鞍橋金具, 福泉洞35号墳からは木心鉄板張輪鐙と心葉形杏葉, 馬甲が出土している。形態や製作技術でみると高句麗との関連が深く, 贈答や交易ときには交戦などによってもたらされたのであろう。また百済の新鳳洞古墳群には, はみえだ轡と木心鉄板張輪鐙が集中して副葬されている。これらから伽耶や百済に, 例はまだ少ないながらも騎馬を復原することが可能である。

さらに伽耶の陝川玉田古墳群, 咸陽上栢里, 釜山蓮山洞, 高靈池山洞32号墳などでは横矧板鋌留短甲, 衝角付冑などが出土し, 伽耶製か倭製か議論が続いている。5世紀前半の陶質土器の倭への伝播などと共に, 伽耶, 百済, 倭の複雑な相互交流を物語る資料にちがいない。

4世紀後半から5世紀前半にかけては, 蒙古鉢形冑と組み合う甲に挂甲と短甲との両者があり, さらに衝角付冑が加わる。また轡や鐙に杏葉が伴い, さらに馬甲や馬冑が伴うようになる。

このように出土状態を仔細に観察すれば, 主柳と副柳へ異なるセットの馬具や武器, 武具を別々にいれている場合や, 木棺内での身体着装と木棺外への副葬などを識別できる。われわれにとっては一見同じにみえて見過ごし易い副葬品であっても, 被葬者や埋葬した当事者は, 葬送儀礼にしたがって意図的に区別して配置したのかもしれない。とくに飾りの多い装飾品と簡素で実用的な品物とでは, 場所を違えて納めた可能性があり, 副葬状態や伴出状況の確認, 検証に努めるべきであろう。

高句麗では、桓仁19号墳、集安万宝汀242号墳S 1、禹山墓区3241墓、3283墓、3560墓<sup>(14)</sup>などから、はみえだ轡や鞍橋金具など古い馬具が出土している（図5）。集安七星山96号墳からは楕円形鏡板付轡、木心鉄板張輪鍔、心葉形杏葉、鞍金具、禹山下41号墓からは鞍橋金具、木心鉄板張輪鍔、歩揺付飾金具など新しい馬具、それに甲冑が出土している。しかし高句麗の古墳は横穴式石室で盗堀に遭い易く、また出土状態を示した実測図が少なく詳細が不明で、セット関係や遺物配列状態をつかみにくいのが惜しまれる<sup>(15)</sup>。

4世紀中葉から5世紀末の高句麗古墳壁画には、騎馬戦闘図や騎馬軍団が数多く描かれている。しかし現実の高句麗墳墓からはそれを示す馬甲や馬冑がいまだに検出されていないのは真に不可解である。半農半牧の生活を営む高句麗に対して、乗馬にたけた騎馬民族の姿を過大に求めすぎているかもしれない。これほど出土例がないと、高句麗では馬甲、馬冑を墳墓に埋葬しなかった可能性をも考慮しなければならない。

5世紀中葉の伽耶の甲冑は、堅矧板鋸留短甲が残り、三角板と長方板の短甲が加わり、挂甲と蒙古鉢形冑が中心となる。馬上での動作が容易な挂甲は、東萊福泉洞11号墳、池山洞32号墳、慶州皇吾洞54号墳などから出土した。挂甲に付属する頸甲は、福泉洞11号墳、南原月山里M 1－A号墳などから出土している。

各種の馬具は、馬甲や馬冑を伴う。釜山福泉洞10号墳や蓮山洞8号墳、大成洞1号墳、五倫台古墳、皇南洞109号墳4 柳、陝川玉田古墳群では、馬冑（図6）が出土している。特に福泉洞古墳群では3個の馬冑が出土し、玉田古墳群では7個の馬冑が出土するなど、伽耶における騎馬軍団の可能性を推測させている。馬甲、馬冑を含む馬具類は、高句麗系であろう。しかし高句麗製か伽耶製かは、前述したように高句麗の実物資料が未発見のため、現状では断定しがたい。

f 字形鏡板付轡は、洛東江中流域の伽耶と百済公州地域で剣菱形杏葉などと出土する。5世紀の軍事技術は、朝鮮の甲冑と比べてもそのままの形で高句麗から朝鮮南部を経て倭に伝わるわけではない。朝鮮の中でも百済、伽耶、新羅においてそれぞれの取捨選択がはたらき、地方ごとに受け入れられて、地域的な特徴を産みながら定着していく。それら各地域差のある馬具を倭でも受け入れていくわけである。

中国や高句麗では、集団戦術に適した重装騎兵で、人馬ともに甲冑で身を固めている。実際の騎馬軍団そのものの遺物はないが、その具体的な軍団構成（重装騎兵、軽騎兵、歩兵）や戦闘場面は、秦・始皇帝の兵马俑坑や咸陽楊家湾漢墓の陶製騎兵隊俑、高句麗の古墳壁画などで観察できる（図3）。また高句麗では、騎馬軍団を防ぐための関や出城が北方に面する谷や通路をかためて何重にも配置されているのを、この夏（1994年）の中国旅行で確かめてきた<sup>(16)</sup>。さらに集安の平地に位置する国内城は、高さ数メートルに及ぶ石築城壁で数キロにわたって方形に囲まれている。高句麗のほか百済や新羅などにも山城が築かれ、周囲の山なみの稜線を延々と石垣や土塁がめぐっている。いずれも騎馬軍団を予想した防衛施設であり、堅固なつくりで、地上の遺

構として今に残っている。高句麗、百濟、新羅の山城を歩くと、よくも築いたものだと感心すると共に、大陸での生死をかけた戦いのすさまじさと厳しさ、敵の侵略の恐ろしさを垣間見る想いがする。

高句麗の好太王が400年前後に敢行した数次の対南侵攻の軍事作戦行動に関連して伝わったのが大成洞や福泉洞の古墳群出土品にみられる伽耶の馬冑、馬甲、馬具、挂甲、頸甲、蒙古鉢形冑、鉄矛、鉄鏃などであろう。これらは重装騎馬軍団の構成を彷彿とさせるが、鉄鎌や鉄斧などの農具が伴出し、遊牧民の面影を読みとることはできない。江上氏の望む夫余系辰王国の騎馬文化とするには4世紀末から5世紀前半と時代が離れすぎ、韓倭連合征服王朝の遺物とはみなしがたいのである。

### 3. 日本の騎馬文化の遺跡と遺構、遺物

倭では弥生の墳丘墓から前方後円墳に飛躍するためには、何か外来の影響があったことは確かである。しかし騎馬の風習をもつ高句麗の積石塚や木槨土墳墓の伽耶の墓制などとは、形態や内部構造にしても全く繋がりを持たない。まして一旦成立した前方後円墳という倭の独特な墳形は、古墳時代を通じて一度も他の墳形に替わることはなかった。

権力発生後の墳墓である古墳は、首長権力の継承儀礼を執り行う神聖で重要な祭祀場であり、特に統一国家の成立期に巨大な墳丘墓がきざかれるのは、洋の東西を問わず普遍的におこる現象である。国家成立期の古墳こそ政治的権力のシンボル、権威を誇示する一大モニュメントであった。それが形態や内部構造、葬送祭祀方法にいたるまで大きな変化がなく、4世紀初から5世紀中葉まで伝統をもって造られ続けている。

4世紀に崇神天皇が北九州へ侵入して征服王朝の橋頭堡を築いたのなら、なぜ彼らの権威を誇示した墓制が続けなかったか。なぜ征服者独自の墓がなく、畿内系の前方後円墳が4世紀初から6世紀末まで九州北部で連綿と造られ続けるのか。誰もが感じる素朴な疑問である。

乗馬の風習や騎馬文化が百濟や伽耶を通じて倭にまで伝わってきた点は、ほとんどの考古学研究者が認めている事実である。ただ江上氏のように4世紀に騎馬民族の王侯貴族と騎馬軍団とが北九州へ侵入した結果とはみなさないだけである。ましてそれに続く5世紀の畿内への東征と征服王朝国家の樹立を立証するのは、現在の考古学の成果と発掘調査の実態からみると、無謀な企てと言うほかない。

福岡県宗像市久原1区1号墳からは、4世紀後半の片側だけの鉄製輪鐙が出土し、4世紀後半から5世紀初めの福岡市老司古墳3号石室と甘木市池の上6号墳からはみえだ轡（図5）が出土している。これらは、ごく一部の墳墓に馬具（轡と鐙）が存在するのみで、騎馬用の武器や武具は伴っていない。しかも多量の馬具が普及する前の馬具であり、騎馬戦闘に用いた馬具とは認めがたい。そのうえ老司古墳3号石室では、畿内に分布の中心がある三角縁神獣鏡や短甲などを伴う

点から、古墳時代前期以来の畿内との深いつながりを認めざるを得ないのである。

つぎに江上氏は「この韓倭連合の辰王国が領域を拡大して、5世紀はじめの応神天皇のときに倭人の中枢部たる畿内の摂津、河内に進出し、国名を倭国とした」と述べる。神武東征神話ではなく応神が東征したといい、「日本」という国号から「倭国」になったという。「日本」から逆もどりして「倭国」へ、そして再度また「日本」になり得たのかと考えこんでしまう。

5世紀前半の古墳から本格的に出土する初期の馬具は、装飾性の少ないはみえだ轡と木心鉄板張輪鍔で、杏葉などの馬装具を伴わない。北部九州から瀬戸内、畿内へとゆっくり伝わり、しだいに数を増していく。これらの馬具を出土する古墳は、古墳群内でもまだ一部の主要古墳に限られ、各地で急激に増加するわけではない。この事実から倭での馬具と騎馬の習慣は、漸移的に進んだと認定でき、騎乗のための馬具はあっても騎馬戦闘用の武器や武具をもつ騎馬軍団は復原できず、騎馬民族の侵入による突発的な変化は観察できないのである。

ところが江上氏は「応神以後の倭の五王は日本列島の征服活動を続け、5世紀後半の雄略天皇の時代前後には倭国を征服統一して征服王朝国家の大和朝廷をはじめた」と主張している。しかしこれは考古学的事実を軽視した立論で、征服活動を示す騎馬戦闘用の攻撃武器や騎馬防御のための遺構も検出されていないのである。

本当に騎馬による戦闘や騎馬軍団の武力を背景にした脅威があったのか。

視野を墳墓から生活址にかえて、発掘され構造が確かめられている集落や豪族居館などをみても、騎馬を防ぐための柵や防塁、城壁がつくられた例は見あたらないのである。そこには弥生時代以来の歩兵を対象にした深い溝や高い柵列は存在するが、馬の飛び越せない幅広い溝や幾重にも連ねた騎馬防御柵は未検出である。また長槍や曲刀刀、蛮弓など騎馬戦闘によると見られる犠牲者は、これだけ発掘調査が進んだにもかかわらず古墳被葬者の中には認められない。この点で山城や石垣で防御をし、騎馬軍団の来襲にそなえた朝鮮各国とは大きな違いがある。

5世紀中葉にかけて、磐田御廟山古墳（伝応神天皇陵）陪塚の丸山古墳出土と伝える遺物をはじめとして、装飾性に富んだ鞍、鏡板付轡や鍔がみられはじめる。面繫、胸繫、尻繫の三繫（面繫の辻金具、三環鈴、馬鐸、步揺付飾金具など）を含む装飾性の強い馬具が、主に岐阜県以西の西日本各地の中型以上の主要古墳に広がる。さらに伴出品をみると、銅鏡や装飾品、武具などに畿内系の遺物を含んでいて、畿内からの影響が認められるのである。出土した馬具だけでなく副葬品全体の組み合わせや配置などを総合的に比較すべきであろう。しかも主要古墳出土の馬具は、装飾性がつよく征服活動に使う戦闘的馬具とはみなしがたい。これにたいして中、小型の古墳から出土する馬具は、前の系統をついで装飾は少ない。古墳出土の馬具に、階層性が現れはじめている<sup>(17)</sup>。

こうした馬具にみる階層分化の動きは日本ばかりでなく、伽耶や百済の馬具にも認められる点は、すでに指摘したところである。その源流は朝鮮南部を通じて高句麗や慕容鮮卑にまで繋り、

東アジア全体を通じての相互交流が、5世紀初から中葉にかけて存在した事実を反映している。そして倭では、古墳の墳形や立地、副葬品、生産遺跡などを総合して判断すれば、関東以西から九州北部までの地域は、古墳前期から引続き畿内勢力の影響化にあったと解釈できるのである。

中国東北地区で、朝鮮や日本でも出土する轡や鐙、鞍や馬鐸、三環鈴などの馬具と、鉄製刀・剣、鉄矛、鉄鏃、スパイク付き履や帯金具などを、南は集安の高句麗積石塚から、北は黒竜江省望奎県戚家園子の鮮卑土墳墓まで広い範囲で観察することができた<sup>(18)</sup>。そこでみられる馬具は、装飾付きのハレの馬具と簡素な実用の馬具との二種が存在し、使い分けがあるようだ。

5世紀前半までの初期の馬具は、ほとんど朝鮮南部の百済や伽耶からの輸入品である。5世紀中ごろ以後、馬具のセットの中に鉄地金銅張鏡板付轡などの装飾的馬具が加わり流行する。古墳出土の馬具一式の組み合わせや馬形埴輪からみて、馬そのものと馬を飼育し、調教できる人達(馬飼い)が渡来しているのもまた事実である。こうした装飾的馬具の組み合わせは、飾り馬の行進や、馬に慣れた従者に轡をとらせ飾りたてた馬にまたがり儀礼の場に赴く首長の姿を想像させる。

ところで馬具が出現した後に相当な数の馬形埴輪がつくられたが、埴輪馬は装飾品をつけた飾り馬として表現されるものが多い。古墳に飾り馬をかたどった馬形埴輪をたて並べること自体が、現実の社会生活での飾り馬の重要性、威信財、権威の象徴となっていた倭の騎馬文化の実態を想起させてくれる。このように倭の権威の象徴としての馬具は、騎馬民族の重装騎馬ではなく、むしろ人々に見せびらかすための飾り馬が主だったのである。

5世紀後半に百済の公州地域と伽耶の洛東江中流域から導入されたf字形鏡板付轡と剣菱形杏葉は、倭で大変好まれ、すでにあった新羅系の馬鐸を加えて国産品を作り、独自の馬装セットを生み出したのである。この組み合わせは、北部九州では別々に副葬され、むしろ畿内での伴出例が多く、のちには全国に普及する。

5世紀代前半からの甲冑は、革綴技法による衝角付冑と短甲が主で、短甲は身体の屈伸が自由なため鞍上にまたがった動作には不向きで、非騎馬的な色彩を帯びている。5世紀の中葉以後からは眉庇付冑、挂甲、馬具などが普及する。眉庇付冑は、野球帽のような庇がつき短甲と組み合わせるので歩兵用であろう。畿内政権によって戦闘方法や生産技術にみあうように作り変えられ組み替えられたのである。

ところで、馬上での動作が容易な小札を綴じ合わせた挂甲は、大阪長持山古墳から出土して衝角付冑とセットをなし一体分に復原されている。しかし短甲にくらべると出土数は圧倒的に少ない。馬冑は和歌山大谷古墳と埼玉将軍山古墳とから出土している(図6)。大谷古墳からは馬冑のほかに馬甲、挂甲などが伴出しているが、草摺りや臍当て、籠手などの付属具を伴わず、重装騎兵の完全装備とはいえない。実戦に使ったか否かは、遺物にのこる使用痕の顕微鏡観察など科学的方法による検討が必要である。しかし仿製品がないうえ出土例が少なく、有効な兵器とし

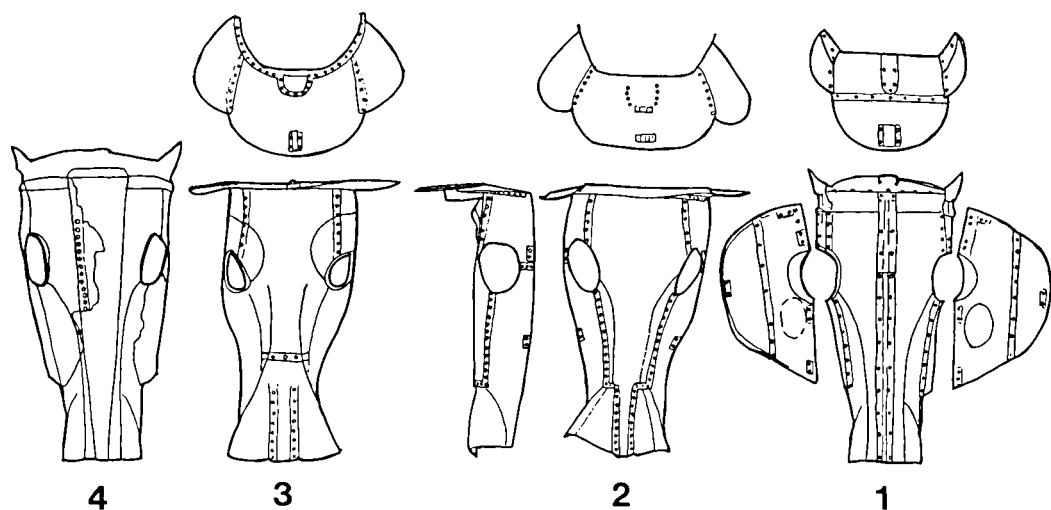


図6 伽耶，倭出土の馬冑（1 福泉洞10号墳，2 玉田3号墳，3 大谷古墳，4 將軍山古墳）

て普及したとは考えにくい。

大谷古墳での出土状態と遺物の組み合わせを検討すると、盗掘された石棺内からは、原位置を動いて破損しているものの鉄製刀剣、鉄鏃、衝角付冑、挂甲、銀製垂飾付耳飾り、銅鏡などの破片が確認できた<sup>(19)</sup>。棺外の副葬遺物は、棺の北、東、西でそれぞれ検出された。北側では石棺にそわせて下端に石突をもつ鉄矛五本を揃えて置く。石棺の東下に、鉄製の鍬、鎌、手斧、刀子などの農具、工具、壺甕、しおで、東側の壁際には木箱内に装飾性の高い馬具を納めている。西側では短甲と馬冑、馬甲、鞍、輪鐙が墓壇の壁際に並べられていた（図7）。甲冑や馬具でも棺内と棺外との別があり、棺外でもさらに置く場所に違いがある。棺内の遺骸に添えられていたのは、衝角付冑と挂甲で、馬具を伴わない点が注意される。それぞれに異なる意味が与えられているようだが、馬具はいずれも棺外に置かれ、特別に愛用されたとはいえない出土状態である。

馬冑と馬甲とは、外国製の新兵器として舶載されたが、武器、武具として戦闘に使われることなく、威信財として保有され、所有者の死に伴って墓壇内に副葬されたのであろう。鮮卑の墓とされる老河深56号墓や孝民屯の馬具の埋葬とは、内容と質においてかなりの隔たりがあるとみなされる。

古墳出土の武器類からみて、当時の倭では長弓と鉄鏃矢をもち鉄刀で武装した歩兵が主力であった。重い甲冑をつけ長い槍を鞍上で操作する重装騎兵は、多雨で樹木が多く山川の起伏が激しい倭の生態的、地理的条件には適合しなかったと想像する。

古墳時代中期以降に出現する馬具以外の渡来文物をみても、江上氏のいう「大陸騎馬民族の文化複合体そのもの」が来たのではない。大陸文化のオリジナルあるいはセットそのものが伝来、普及したのではなく、むしろ倭人の好みや社会条件に適合して取捨選択された文物や技術のみが導入され定着できたのである。

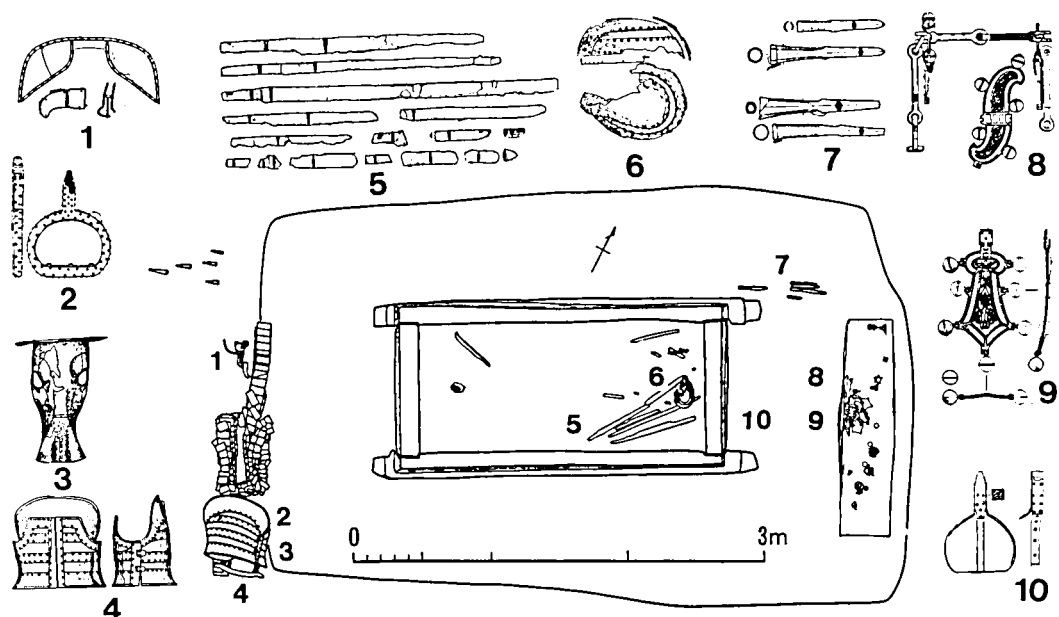


図7 大谷古墳の遺物伴出状態（1 金銅装鞍，2 木心鉄板張輪鍔，3 馬冑，4 横矧板鍔留短甲，5 鉄製刀剣，6 衝角付冑，7 鉄矛，8 金銅鏡板付轡，9 金銅花唐草文杏葉，10 木心鉄板飾壺鍔）

6世紀になると、楕円形鏡板付轡と楕円形杏葉が加わり、6世紀半ばには鐘形鏡板付轡と鐘形杏葉とが出現する。6世紀代の馬具は多様化し、かつ国内での量産化が進み、普及していく。

6世紀後半の群集墳には、いかにも実用一点張りの鉄製轡や鉄製鍔が副葬されている。群集墳の中の小古墳にまで馬具が副葬されており、乗馬の風習が倭の広い範囲で一般の人々にまで普及し浸透した事実を反映している。いっぽう藤の木古墳や宮地嶽古墳からは、パルメット紋や動物紋を立体的な半肉彫りや透かし彫りで表現した豪華な馬具が出土している。いずれも騎馬民族の戦闘用とは考えがたい馬具である<sup>(20)</sup>。

倭の古墳時代を通じて、重装騎馬軍団用の武装一揃いを納めた天皇陵、騎馬軍団に利用できる一定量の馬具や武器、武具などを副葬した首長墳、または各墳ごとに馬具や騎馬戦用武器を納めて古墳群全体として騎馬軍団を構成できる古墳群、以上のどれひとつもいまだに見いだし得ないのである。さらに騎馬戦闘にそなえた防御用の施設さえ検出されていない。倭の古墳時代はおおよそ300年であるが、騎馬戦あるいは騎馬軍団の脅威を示す考古学資料は、皆無である。

この考古学的事実からは、いかに強弁しても騎馬民族の日本侵入と征服王朝の樹立を証明することはできないと思われる。

#### 4. おわりに

上で述べたように現在の東アジア考古学の成果でみるかぎり、今となっては「騎馬民族征服王

朝説」は、全く成立の余地がない。

かつて1970年代に提唱された豊かな北半球が貧しい南半球を搾取するという「南北問題」が、細かな地域差を無視し、いかにも大雑把であったように、常に貧しい北方の牧畜民族が豊かな南の穀倉地帯を襲うというウィットフォーゲル起源の「征服王朝」説は、硬直した古い考え方と言わざるを得ない。貧しいのは常に北方の牧畜民族とは限らない。周りを見渡せば、貧しく生活の苦しい農耕民族もいるではないか。

人類の歴史は南北の関係だけではなく、東西にもあるいは斜めにも交叉し放射しそれぞれ関連しながら展開している。ひとつの文化や固定観念で歴史や民族をとらえようとする視点、ひとつの国家に多くの民族を無理に押し込めようとする政治的思想、そうした考え方自体に無理がある点をわれわれは既に歴史の中で経験し、現実の社会変革で学習してきた。

騎馬民族と農耕民族の南北対立で東アジアの歴史を構想し、細かな地域性を捨て去った「騎馬民族征服王朝説」は、もはや成り立ち得ない古い歴史理論に立脚している。日本国家の起源を大陸北方草原の騎馬民族に求めようとしたロマンチックな「騎馬民族征服王朝説」は、結局のところ幻人の夢に過ぎなかったようである。

東アジアの歴史は、騎馬民族と農耕民族とによる南北対立と抗争の歴史ではなく、中国大陸の黄河と長江流域に生じた中国文明をとりまく周辺の各民族（農耕民、漁撈民、牧畜民、採集狩猟民など）が、中国大陸を経由して間接的に、時には直接に南北や東西に相互交流して展開させた歴史である。東アジア史に限らず征服と被征服の視点で人類の歴史をみるのは、征服や戦争によって歴史が変わるとみなす第二次大戦までの植民地支配と侵略史観、戦後の東西冷戦による武力の均衡を信奉する古い世界観、歴史観と断ぜざるを得ない。

日本国家の成立は、決して大陸渡来の「騎馬民族征服王朝」によるのではなく、東アジア諸民族の相互交流の大きな歴史の動きの中で、倭に定住していた人々を中心にして達成されたのである。

筆者がことさらに言うまでもなく、すでに1982年に田辺昭三氏は「やはりこの騎馬民族説は、それが提唱された時代の要請と制約の中で生まれた歴史的産物であり、装いをいかに改めたとしても、もはや現役の学説として正面から取り上げる段階ではない」と指摘している<sup>(21)</sup>。また佐原 眞氏は「そうです。騎馬民族説は、江上さんが創り出した昭和の伝説なのです」と批判しながらも敬意をこめて述べている<sup>(22)</sup>。

第2次大戦後の混乱期にうまれた仮説は、その後めざましく発展した考古学の成果とも大きな乖離をみせている。さらに新発見の考古学資料を現在の研究レベルで分析、検討することなく、柔軟な思考の持ち主であった氏が「江上天皇」といわれるほど独善的になっている現状は、実にさみしいかぎりである。

江上氏の騎馬民族説とともに私の脳裏をよぎるのは、明治に唱えられた坪井正五郎のコロボッ



クル説である。神話、伝説に題材をとり、広く民族学や文献史学を援用し、考古学資料を解釈しようとした姿勢に共通点を見いだす。アイヌの伝説にでてくる路の下に隠れるほどの人・コロポックルを先住民とみなして日本人起源論に挑み、孤軍奮闘した坪井とよく似ている。いずれも言葉のひびきが良く何かロマンチックな雰囲気につつまれているが実態は明かでない。しかし一般の人々にとっては学界きっての権威がかたるパラダイムと映じてしまうのである。まさに江上波夫氏は、明治の坪井正五郎と肩を並べるほどの、いや坪井に勝るとも劣らない、氏が創造した「騎馬民族征服王朝神話」の〈昭和の語り部〉といえよう。 1994年9月30日稿了

## 注

- (1) 岡内三眞「騎馬民族説について」『古墳時代の研究 1 3 巻』pp, 158-171, 1993, 雄山閣。
- (2) 江上波夫「江上波夫の日本古代史—騎馬民族説 4 5 年—」1992, 大巧社。
- (3) 老河深の出土遺物については、吉林省博物館で実見することができた。お世話になった方 起東、王 俠氏に感謝いたします。  
吉林省文物考古研究所『榆樹老河深』1987, 文物出版社。
- (4) 顧 志界「オルドス式銅（鉄）釜の形態分析」『北方文物』pp, 19-22, 7 号, 1986。
- (5) 申 敬澈「伽耶成立前後の諸問題」『伽耶と古代東アジア』pp, 115-180, 1993, 新人物往来社。  
しかし報告書が出版されている福泉洞古墳群を除くと、他の重要な古墳はまだ調査が継続中で、概報以外には正確な内容は不明である。正式報告書の出版によっては多少の違いや訂正が生じるかも知れないことを、前もってお断りしておく。
- (6) 考古研究所安陽工作隊「安陽孝民屯晋墓発掘報告」『考古』pp, 501-511, 1983-6。
- (7) 遼寧省博物館文物隊ほか「朝陽袁台子東晋壁画墓」『文物』pp, 29-45, 1984-6。
- (8) 黎 瑤渤「遼寧北票県西官営子北燕馮素弗墓」『文物』pp, 2-28, 1973-3。
- (9) 遼寧省博物館「遼寧本溪晋墓」『考古』pp, 715-720, 1984-8。
- (10) 中国科学院考古研究所『鄧県彩色壁画墓』1976。
- (11) 湖南省博物館「長沙兩晋南朝陵墓発掘報告」『考古学報』pp, 75-105, 1959-3。
- (12) 樋口隆康「鐙の発生」『晋陵』19号, 1972, 橿原考古学研究所。
- (13) 伽耶地域の遺跡と遺物の観察では、釜山大学（鄭 澄元氏ほか）、東義大学（林 孝澤氏ほか）、慶星大学（申敬澈氏ほか）などに大変お世話になった。記して感謝いたします。
- (14) 吉林省文物考古研究所、集安市文物保管所「集安洞溝古墓群禹山墓区集錫公路墓葬発掘」『高句麗研究文集』pp, 21-79, 1993, 延边大学出版社。
- (15) 集安の高句麗関係の遺跡と遺物の実見については、集安博物館の孫 仁傑、耿 鉄華氏にお世話になった。記して感謝いたします。
- (16) 1994年9月の中国東北地区への調査旅行では、中国各地の関係機関をはじめ、田村晃一団長ほか団員諸氏には大変お世話になった。記して感謝いたします。
- (17) この時期から群集墳の終わる時期までの馬具は、王陵規模の大型古墳と規模の小さな古墳の出土品とでは分けて記述すべきであるが、今回は紙幅の都合で一緒に論じておく。
- (18) 望奎県戚家園子をはじめ黒龍江省の遺跡、遺物については劉 曉東、孫 長慶氏にお世話になった。記して感謝いたします。
- (19) 樋口隆康ほか『増補・大谷古墳』1985, 同朋社。
- (20) 倭における馬具や甲冑の実態については、早稲田大学大学院演習で院生と共に討論した内容を含んでいる。

ゼミに参加した院生諸氏に感謝する。

- (21) 田辺昭三『卑弥呼以後』pp, 215-225, 1982, 徳間書店.
- (22) 佐原 眞『騎馬民族は来なかった』1993, 日本放送出版協会.